

論文審査の要旨

| | | | |
|---|----------------|----|-----|
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（ 学 術 ） | 氏名 | 于 君 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第①・2項該当 | | |
| <p>論 文 題 目</p> <p>軍記物語に描き出された武士像 — 『平家物語』と『太平記』における —</p> | | | |
| <p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 中村 春作</p> <p>審査委員 教授 西原 大輔</p> <p>審査委員 教授 竹村 信治</p> <p>審査委員 准教授 西村 大志</p> | | | |
| <p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、日本中世の二つの軍記物語、『平家物語』と『太平記』を題材に、日本において武士がどのように語り出されたか、武士像がいかなるものとして形成されてきたかを実証的に明らかにしようとするものであり、現代にいたるまで日本文化論の一大要素ともなってきた武士像の原型を、その最初期の姿において解明しようとしたものである。</p> <p>本論文は、序章以下、終章に至る、全七章で構成されている。以下にその内容を記す。</p> <p>序章では、本論文の研究目的が、その方法論とともに述べられる。論者が本研究を志すにいたった経緯が示され、日本における武士像形成の起源をまず中世の軍記物語に探る意図が述べられる。その上で近年の武士研究の概要が整理され、さらに本研究の視点と、武士の「真の姿、思想」なるものの解明ではなく、あくまでも軍記物語において武士像がいかに描き出されたかを明らかにしようとする論者の方法が提示される。</p> <p>第一章『平家物語』における武士の「名」では、これまでの武士研究においても注目されてきた、中世武士の「名を惜しむ」生き方に焦点が当てられ、『平家物語』中に武士に関わって「名」がどのように記述されているかが詳論される。そしてその個々の具体的文脈の中から「名」の内実、意味が細分化して検討され、特に、主従関係において生起する一人の武士としての「名」の意味、所属する「家」との関わりから重んじられる「名」の重要性が、その具体相とともに明らかにされる。</p> <p>第二章『平家物語』における武士の「孝」と「忠」では、『平家物語』中、「孝」と「忠」が象徴的に現れた平重盛の場面を中心に、そこで両概念がどのような意味合いで使われているかをコンテキストの中から明らかにしている。論者は、当時の日本における儒教の「孝」と仏教の「孝」の受容の姿を整理した上で、平重盛において語られる両概念は、もっぱら「諫言」としての機能が重視されたものであったと結論づけ、物語全体のなかで平重盛が「理想的武士」として描出されるに至った理由を説得的に明らかにしている。</p> <p>第三章『平家物語』における武士間の「つながり」では、『平家物語』における武士の「情」について論じた津田左右吉のかつての議論に言及した後、『平家物語』本文には「情」という表現そのものはほぼ出現しないこと、しかしながら、津田が指摘したような武士間の情愛に関わる表現が多く見られることに注意を促す。論者はそれを仮に「武士間のつな</p> | | | |

がり」と規定した上で、その多様なありようを明快に整理する。論者は特に、主従間、兄弟間、敵との間、父子間という四つの関係を提示し、それぞれにおける「つながり」の姿の相違を明らかにし、『平家物語』独自の武士像を提示する。

第四章『太平記』における武士の「忠」と「孝」では、まず『太平記』中の楠木正成、正行が、戦前まで学校教育の中でどのように扱われてきたか、近世後期以降の『太平記』受容史を検証した上で、楠父子にとどまらず、その他の武士たちがどのように「忠」と「孝」から語り出されたかを明らかにし、特に戦の場面で、「忠」「孝」が実に多様な姿で描出されていることに着目する。そして『平家物語』における「孝」重視の視点に対し、ここでは「忠孝一致」の考え方が強調されるに至ったことを、比較対照的に明らかにする。

第五章『太平記』における武士の「恩」では、『平家物語』中では限定的、かつ教訓的な意味あいでは出現しなかった「恩」に関わる表現が、『太平記』には多出することに着目し、相異なる武士の生き死にの場面で「恩」の感情がとりわけ重視されたこと、「報恩する武士」の姿が、『太平記』に特徴的に表出されていることを明快に論証する。

終章では、以上各章の内容を思想史の問題として整理し直し、その総括を行っている。『平家物語』『太平記』両者に共通するものとして、「名を重んじる武士像」の継承が見られる一方、同じく「忠」と「孝」で語られながら、平重盛一人が理想的「忠臣孝子」像の象徴として、そして究極的には「孝」に収斂するものとして語られた『平家物語』に対し、いわば生の「現代史」として叙述された『太平記』では、戦の場面で、様々な主従関係や父子関係に応じて多様な「忠」と「孝」の関係（そしてその連続）が語り出されたことを明らかにする。他方、『平家物語』における独自の武士像として、多様な情誼的關係における武士間のつながりが描出されたのに対し、『太平記』では「報恩する武士像」が描き出されたことを結論づける。そしてこの両者の相違に関して、歴史的場面の異なり、両作品の背景にあった宗教思想の異なり、テキスト構成の異なり等について検討を加えている。

そして最後に、本論で明らかにした中世の二つの軍記物語における武士像が、後代の武士の倫理や道徳的規範として、随時、取捨選択を経ながら語り直されてきたことを示唆し、その近世期以降における検証の必要性に論じ至って、本論文を終えている。

本論文は、以上のように、日本中世を代表する軍記物語、『平家物語』『太平記』の原典を精密に読み込むことを通じて、日本における武士像形成の原点を明らかにしようとしたものであり、特に以下の三点において評価できる。

第一に、概念から演繹的に説明するのではなく、武士を語る個々の生のことばを、それぞれの文脈上でいねいに解読した上で、その思想史的意味を鮮明化した点、第二に、『平家物語』における「武士間のつながり」、『太平記』における「報恩する武士像」という新たな論点を提出した点、第三に先行する諸研究を正確に位置づけ、その上で、中世に描き出された武士像の時代精神的側面を明らかにした点、の三点である。さらに付け加えれば、外国人である論者が、日本人研究者が無意識のうちに有する先入観を排し、きわめて対象的に中世の武士像を摘出し得たこと、そしてこれまでも多くあった文学的研究ではなく思想史的検討の題材として、両作品を論じきったことは、中国における今後の武士思想研究に対して貢献をなすものと考えられる。以上、審査の結果、審査委員一致して、本論文の著者が、博士（学術）の学位を授与されるのに十分な資格があると認めるものである。

平成28年10月4日

